

令和七年度 前期

博多女子高等学校

入学試験問題

国語

注 意

- 一、合図があるまでこの冊子を開かないこと。
- 一、答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 一、問題の内容に関する質問は受け付けない。
- 一、途中退出は解答作成中の他の受験生に迷惑になるので認めない。

1

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

私たちは、身の回りの人の行動の原因について、よく考えたり話したりします。職場の行き帰りに見かけるあの人がよく挨拶をしてくれるのはなぜか？ お母さんが誕生日のプレゼントを買ってくれなかったのはなぜか？

こういったことについて、私たちは「あの人は愛想が良いからだ」「お母さんがケチだったからだ」などと考えます。が、実際にそうだったかは、本人に聞いてみないと（あるいはもしかすると、本人に聞いてみても）わかりません。

しかしそれでも、私たちは「愛想の良さ」「ケチという性格」といった、人の内的属性に原因を求めようとします。これが「基本的帰属の誤り」^①です。

「これが誤りだつて？ 当たり前のことじゃないの？」と思われるかもしれませんが、しかし、よく挨拶するあの人は、もしかすると人に挨拶をした数に応じてお金をもらっていたのかもしれませんが。誕生日にプレゼントを買ってくれなかったお母さんは、あなたの進学費用をちよきん^aしていたのかもしれませんが。このように、外的要因^②による行動の原因がいくらでも考えられるのに、私たちは性格や意見などの内的要因^③こそがその人の行動の原因であると信じて原因帰属し、他の要因を考えないことがよくあります。

これは、あまりにも広く見られるので、社会心理学者のロスはこれを「基本的帰属の誤り」と呼びました。

④ 私たちはこれを、個人の行動だけでなく、多数の人の集合についても当てはめて説明しようとしています。たとえば、昔、就職できずにフリーターになる大卒者が増えた時期がありました。今よりずっと、大卒後は就職するべきという考えが強かった頃です。もともとフリーターという言葉は、卒業↓正社員として就職、という流れにあえて乗らずに主体的に別の生き方を選択する人のことを指していました。しかし、景気が悪化するとともに企業が新卒の正社員の採用を抑制し始めると、就職を希望しつつも就職活動がうまくいかず、不本意ながら正社員とならなかった人たちが増えていきました。大卒非正規^bこうという外面を見ると元来のフリーターと同じであるため、一括してフリーターと呼ばれました。やがてその数が増え、問題視されるようになりました。この現象が始まった頃、「今の大学生は働く意識が弱いのが原因だ」というふうに主張されることもありましたが、しかし実際には、景気悪化によって企業が人件費を削るために新卒採用を抑制したり、働きがいのある職が減ったりしたことが原因でした。

このように、マクロな要因で説明されるべき事柄であっても、私たちは個々の人間の「意識」に原因を求めがちです。このような文脈で一般に使われる「意識」という言葉は心理学的な意味での意識であることはほとんどなく、「考え方」といった言葉の言い換えであることがほとんどです。その背後には、考え方が行動の原因になっているという素人理論があります。したがって、「意識」

を過大に重視する議論は、人の考え方、つまり社会心理学的にみると内的要因に過大に原因を求める議論と言えます。これは基本的帰属の誤りの典型的な例です。基本的帰属の誤りは非常に強力なバイアスなので、「意識改革が必要」という意見に出会ったら、まず「この論者は基本的帰属の誤りを犯していないか」と疑うようにしましょう。

以上のように、私たちは人の行動の原因が内面にあると考えがちです。それに加えて、人の性格や考え方は、時や場面を通して一貫していると考えられる傾向があります。それが「一貫性バイアス」です。

たとえば、よく知っている大事な人を一人思い浮かべてみてください。家族であったり、恋人であったり、いずれでなくともとても親しくしている人です（社会心理学では「重要他者」と呼ばれます）。そういった人の性格は、最近会ったときも、一年前に会ったときも同じだったでしょうか？ そして、また会えるとしたら、一年後、二年後でも同じでしょうか？ その人が、あなた以外の人と会ったときにも、あなたに会うときと同じような性格の人として立ち現れるでしょうか。

④ こういった質問に「はい」と答えてしまうのが普通です。しかしその人の立場からすれば、相手によって適切な対応を考えて行動を変えているのかもしれませんが。私たち自身のことを振り返ってみるとわかりますが、場面に応じて行動を変えることはよくあります。たとえば、学校の仲間の前ではそこであまりやめていくために、その場で求められる「キャラ」を演じるかもしれません。つまり、お母さんの前では良い子に振る舞う一方で、仲間内ではゆうかんに振る舞ってみたり、お調子者として振る舞ってみたりするかもしれません。そして仲間内での振る舞い方は、仲間の状況や雰囲気に応じて変わっていくかもしれません。

このように、私たちは自分のこととして見てみれば、振る舞い方や行動が相手や状況によって変わることを知っています。ですが、他人の行動を理解するにあたっては、相手は一貫した性格を持っていて、その性格のもとにいろいろな時や状況を通じて同じように行動していると考えがちです。

私たちは、人の性格について「暗黙の人格理論」というものを持っています。暗黙の人格理論では、行動の原因となるものが個々人のなかに一貫して存在し、時間や場所や状況が異なっても同じような現れ方をすると考えます。そしてその原因のなかには、「社交的な人は善良で温かいはずだ」というように性格特性^⑤として同時に起こりやすいものと、両立しにくいものがある（たとえば誠実さと冷酷さは両立しにくい、など）と私たちが考えているとされます。私たちのそのような考えは人生の経験に沿って、特に体系だつたかたちではなく作られています。そして、普段は意識されたり議論されたりすることはないので、「暗黙の」と呼ばれています。これは一種の行為者観察者バイアスといえます。行為者観察者バイアスとは、自分自身が行為者となる場合と自分が誰かを観察す

る場合とでは、見え方がまったく違うということです。一貫性バイアスでは、自分は場合や状況、相手に応じて行動を変えているにもかかわらず、自分以外の誰かについては、その人はその人の性格のもとに一貫して行動していると考えなのです。

この傾向が強すぎると、先に挙げた基本的帰属の誤りと同じような誤りを犯す可能性があります。つまり人は状況によってある程度じゅうなんに行動を変えているのに、私たちは自分の目の前のその人がすべてであると考え、自分以外の人の前や自分が見ていない状況でも、自分が見ているときと同じような行動の仕方をしていいると考えなのです。

このようなことを考えても普通は害のないことが多いでしょうが、裁判の判断者（裁判官や陪審員、裁判員）がすると、そうとも限りません。判断者が証拠ではなく「被告人はこういう性格だからこう行動したに違いない」という推測で判断してしまうことにもなりかねません。^⑥

アメリカの裁判官は、暗黙の人格理論をはっきり知っていたわけではないかもしれませんが、裁判においては、性格に関する情報から行動を推測してしまいがちであることを知っていたのでしょう。そのため、被告人があるときにある行動をとったことを証明する証拠としては、被告人の性格に関する証拠を裁判に出すことは許されないとしています。そのため、裁判ではこの点で性格についての考え方が、私たちの日常的な感覚とは異なっています。これは、裁判に関わる人々が性格証拠についての危険性を経験として知っていたからだろうと思います。

逆に言うと、それだけ私たちは人の行動は内的な一貫した何かから生まれるものだと考えたくなるということでもあります。しかしそれは、アメリカの裁判のルールに反するだけでなく、性格が人の行動を説明できる割合はとても小さいという心理学的な知見にも反するのです。

（藤田政博『バイアスとは何か』による。一部改変）

（注）

内的属性…その人が本質的にもっている性質や考え方などのこと

マクロ…巨大

バイアス…先入観や偏見

陪審員…専門の裁判官のほかに、裁判の審理に参加して事実の認定を行う人

知見…ある物事についてのしっかりした考えや見方

問一 本文中の ちよきん^a こよう^b ゆうかん^c じゅうなん^e に適切な漢字をあて、楷書で書きなさい。また、雰囲気^d の――線を施した漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中にある 基本的帰属の誤り^① をしてしまう人は、何にその原因を求めがちになるのか。最も適当な十字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問三 本文中に 外的要因^② 内的要因^③ とあるが、形式段落④における、景気悪化後の就職についての「外的要因」と「内的要因」の具体例とは、それぞれ何か。外的要因の具体例は、最も適当な四十字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。また、内的要因の具体例は、最も適当な十三字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問四 本文中に こういった質問に「はい」と答えてしまうのが普通です^④ とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 私たちは、人の性格や意見などの内的属性こそが、行動の外的要因であると本当に信じて原因帰属し、他の要因を考えない「基本的帰属の誤り」をしてしまいがちだから。
- 2 私たちは、マクロな要因で説明できる事柄であっても、その背後にある、「意識改革」が行動の原因になっているという素人理論から、なかなか抜け出すことができないから。
- 3 私たちは、人の行動の原因が内面にあると考えがちで、それに加え、人の性格や考え方は、時や場面を通して一貫していると考える「一貫性バイアス」を持ちがちだから。
- 4 私たちは、その場で求められる「キャラ」を演じること、つまり仲間の状況や雰囲気に応じて振る舞い方や行動を変えるという適切な対応を、それぞれが身に付けがちだから。
- 5 私たちは、それぞれの人生の経験に沿って、相手は時や状況に応じて、性格特性のもとに行動していると考え「暗黙の人格理論」とともに、成長していくものだから。

問五 本文中の特性^⑤と同じ構成の熟語として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 私立 | 2 | 登山 | 3 | 無理 | 4 | 岩石 | 5 | 清流 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問六 本文中のなりか^⑥ねませんの意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | |
|---|------------|---|-----------|---|-------------|
| 1 | なればいいでしょう | 2 | 必ずなります | 3 | ならなかったら大変です |
| 4 | なる可能性があります | 5 | おそろくなりません | | |

問七 本文中のこの点^⑦とは何か。解答欄の「点」に続く、最も適当な五十七字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問八 本文中に人の行動は内的な一貫した何かから生まれるものだ^⑧とあるが、このような考えをしている生徒の発言として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1 | Aさん…ねえ、陸上部のFさんって、知ってる？　すごく足が速いらしいね。 |
| 2 | Bさん…知ってるよ。県大会で優勝して、九州大会に出場が決定したんだって。 |
| 3 | Cさん…すごいね。ということは、Fさんは勉強もしっかりできるはずだね。 |
| 4 | Dさん…私も、勉強以外で、Fさんみたいに何か夢中になれるものがないかなあ。 |
| 5 | Eさん…私は大好きなダンスで、Fさんのように大会出場を目指して頑張るわ。 |

2

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

昔、唐に宝志和尚といふ聖あり。① いみじく貴くおはしければ、御門、② 「かの聖の姿を影に書きとらん」とて、絵師三人を遣はして、「もし一人しては、書き違ゆる事もあり」とて、三人して面々に写すべき由仰せ含められて、遣はさせ給ふに、三人の絵師聖のもとへ参りて、かく宣旨を蒙りてまうでたる由申しければ、「しばし」といひて、法服の装束して出であひ給へるを、三人の絵師、おのおの書くべき絹を広げて、三人並びて筆を下さんとするに、聖、「しばらく。我がまことの影あり。③ それをみて書き写すべし」とありければ、絵師左右なく書かずして、聖の御顔を見れば、大指の爪にて額の皮をさし切りて、皮を左右へ引き退けてあるより、金色の菩薩の顔をさし出でたり。

一人の絵師は十一面観音と見る。一人の絵師は聖観音と拝み奉りける。④ おのおの見るままに写し奉りて持ちて参りたりければ、御門驚き給ひて、別の使を給ひてとはせ給ふに、かい消つやうにて失せ給ひぬ。それよりぞ「ただ人にてはおはせざりけり」と申し合へりける。

(『宇治拾遺物語』による。一部改変)

(注)

唐…中国	聖…聖人	御門…天皇	絵師…絵を描くことを職業にしている人	遣はして…呼び寄せて
由…内容	宣旨…天皇の考えの知らせ		蒙りて…うけたまわって	まうでたる…うかがった
装束…正装	左右なく書かずして…すぐには書かずに		菩薩…仏のひとつ	十一面観音…仏のひとつ
聖観音…仏のひとつ				

問一 本文中の まうで いひて とは を、それぞれすべて現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に いみじく貴くおはしければ とあるが、その意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 非常に美しいとの評判だったので
- 2 とても気難しい方でいらっしゃったので
- 3 貴族らしくないとの評判だったので
- 4 たいそう尊くていらっしゃったので
- 5 全然人前に出ていらっしゃらなかったで

問三 本文中の 遣はし 出であひ給へる 写し奉り の主語として最も適当なものを、次の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。

- 1 宝志和尚（聖）
- 2 御門
- 3 絵師三人
- 4 別の使
- 5 作者

問四 本文中に 三人して面々に写すべき由仰せ含められて とあるが、その理由として最も適当な十七字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問五 本文中の 影 とは何か。最も適当な一字の語を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問六 本文中に^⑦ 御門驚き給ひて とあるが、なぜ御門は驚いたのか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 絵師たちが描いた絵が突然会話をし始めたから。
- 2 一人の絵師だけが消えた別の使の絵を描いたから。
- 3 絵師たちの絵が世の中で広く支持されたから。
- 4 一人の絵師だけが御門とそっくりの絵を描いたから。
- 5 絵師たちが全く異なる絵をそれぞれ仕上げたから。

問七 本文中に^⑧ ただ人にてはおはせざりけり とあるが、このことがよくわかる最も適当な四十五字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

3

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

① 滝が来てから、吹奏楽部は変わった。以前の部を知っている教師たちは、皆、**I** をそろえてそう言った。滝のやり方に最初は不満を言っていた部員も多かったが、次第にそれも収まっていった。理由は簡単だ。上手くなったと実感したから。バラバラだった演奏が徐々にまとまり、ひとつの音楽を作り上げていく。自己満足の演奏だって確かに楽しいけれど、努力を重ねて極限まで削り込んだ音楽は、楽しいという感情ではなく切り切れない、何か特別な感慨を部員たちの胸に抱かせた。合奏は楽しくて、だけどそれ以上に恐ろしい。細い細い道を踏み外さないように、必死に神経を研ぎ澄ませている。そんな感じ。

指揮者の仕事は、ただ本番で棒を振るだけではない。むしろそれはその役割のほんの一部に過ぎない。彼らが指揮棒を振るのは、演奏者に音の入るきっかけと終わるタイミングの指示を行うためだ。そして全体の音のバランスを聞き、曲をまとめ上げる指導をする。

本番以外の場合で、彼らはその曲の持つ構成や作曲家の意図を把握し、表現や曲の流れを奏者に伝える。この指揮者の指示により、演奏のスタイルや曲のイメージが大きく変わる。そのため、指示の違いがそのまま指揮者の個性となり、楽団の評価へとつながっていく。指揮者というのは、聴衆が感じている以上に重要な役割を果たしているのである。

十年前、北宇治高校がまだ強豪校だった時代、きつとその指導者は優秀な人間だったのだろう。彼がこの学校を去り、そして北宇治の吹奏楽部はどんどんと弱体化していった。顧問が一人変わるだけで、子供たちはその波にほんろう翻弄ほんろうされてしまう。いくら高い志を抱いていても、指導者が優れていなければコンクールには勝ち残れない。

千五百以上ある高校のなかで、全国大会に残れるのはたった三十校足らず。京都府代表として関西大会に進めるのは、三十六校のうち三校だけ。私立や公立が入り乱れ、決して平等とは言えない練習環境のなか、それぞれが尽力して演奏する。北宇治高校が全国大会に進むのは、夢のまた夢だ。

それでも、と久美子と思う。それでも、滝は本気で全国に行こうと考えている。練習のきびしさも、合奏の緊張感も、すべてはこの北宇治を全国大会に連れていくためだ。だったら頑張るしかないじゃないか。

「……上手くなりたいなあ」

久美子のつぶやきに、答える者はいなかった。

オーディションは二日間に分けて行われた。一日目は金管、二日目は木管とパーカッションだった。音楽室に一人ずつ呼ばれ、パーテーションで区切られた個室で演奏した。音楽室の前にはいくらかの席が用意されており、オーディションを受ける者はそこ**b**でたいきする。教室は完全な防音対策がなされているわけではないから、待っているあいだにほかの人の演奏が聞こえてくる。あすかの温かなユーフォニアムの音色を聞いているだけで、久美子はなんだか無性にドキドキしてきた。顔を青くした久美子の肩を叩き、夏紀が立ち上がる。

「じゃ、行ってくるな」

彼女はそう言って、音楽室へ消えていった。久美子は自身のユーフォニアムを抱き締めながら、ただただ楽譜を凝視する。合奏で注意されたところ。滝に指摘された場所。何度も見返しているうちに、クリアファイルの端の部分がどんとすり切れていく。大丈夫だ。きつとできるはず。楽器に息を吹き込みながら、久美子はじつと自分の順番を待つ。

「久美子の番やで」

演奏を終え、音楽室から出てきた夏紀が久美子へと声をかけた。はいと返事しようと思ったのに、緊張しているせいか上手く声が出なかった。無言でうなづく久美子に、夏紀が苦笑する。

「そんな緊張せんでも大丈夫、アンタやったら」

先輩の言葉に背中を押され、久美子はおそろおそろ音楽室へと足を踏み入れた。

「どうぞ、かけてください」

パーテーション越しに滝の声が聞こえる。顔を見せないのは、部員を緊張させないためのはいり**d**だろうか。顔が見えない分、余計にドキドキする気もするが。真ん中にポツンと置かれた席。その前に置いてある楽譜台にファイルをセットしながら、久美子はふうと息を吐き出した。指先が震える。

「学年と名前と担当の楽器を」

「あ、一年、黄前久美子です。低音パート、ユーフォ担当です」

「そうか」

この素っ気ない声は副顧問の美知恵だ。顧問と副顧問、二人がかりでテストするのか。ますます速くなっていく鼓動を抑え込むように、久美子は息を呑み込む。強張った指先をほぐすように軽く動かした。

「チューニングは大丈夫ですか？」

「は、はい。やってきました」

「そうですか。……黄前さんは、経験者なんですよ？ 何年くらいユーフォニアムを演奏しているんですか？」

「えっと、小四からなんで、今年で七年目です」

「七年？ それはなかなかすごいですねえ」

滝が感心したようにうなる。ああ、しまった。ハードルを上げてしまった。ぐるぐると脳味噌を回るネガティブな思考を追い払うように、久美子は頭をぶんぶん横に振る。木製の椅子は座るとひやりとした。汗をかいているせいかな、太ももがその表面に張りつく。

「では最初に、課題曲から吹いてもらいましょうか」

「は、はい」

「ユーフォニアムといえばやっぱりここですよ、四十一小節目からの裏メロ。バリサクと同じ動きをしているところです」

久美子は慌てて楽譜を視線で追う。何度も練習してきた、あの場所だ。

「メトロノームを鳴らしますので、私が止めるまで吹いてください。好きなタイミングで始めていいですよ」

「わ、わかりました」

カチ、カチ、カチ。繰り返されるリズムに耳を澄ませながら、久美子は息を吸い込んだ。肺を膨らませ、マウスピースへと鋭い息を吹き込む。指が動く。低音から高音への移り変わり。練習中、何度も引かなかった連符部分。楽譜は用意していたけれど、それを見ている暇はなかった。高揚感で脳味噌がひりつく。息は震え、心臓は破裂しそうなほどバクバクと忙しく動いている。頭には何も浮かばず、ただ演奏だけが意識を飛び越えて進んでいく。ミスしたらどうしよう。怖くて仕方ないのに、それを楽しんでいる自分がいる。足元から上ってくる熱が、胸のあたりの器官をぎゅっと締め上げる。

「はい、そこまで」

滝がそう言うまで、久美子は必死で演奏し続けた。ユーフォからピタリと音がやむ。パーテーションの向こう側では、何やらカリカリと紙に書きつけている音がした。いまこの瞬間、久美子の演奏が審議されているのだろう。耳の奥ではまだ、じんと先ほどの演奏の余韻が残っていた。

「わかりました、もういいですよ。次はチューバの人たちを呼んでみてください」

「あ、はい」

立ち上がると、なんだか頭がくらくらした。緊張が抜けないのか、指ははまだ震えている。楽譜を抱え込み、久美子は逃げよう

に音楽室をあとにした。

(武田綾乃『響け！ ユーフォニアム 北宇治高校吹奏楽部へようこそ』による。一部改変)

(注)

パーカッション…打楽器の総称

ユーフォニアム・ユーフォ・バリサク・チューバ…楽器の名前

パーテーション…部屋と部屋のあいだの仕切り

チューニング…楽器を調律すること

問一 本文中の き^aび^bし^cさ^d たい^eき^f はい^gり^hよ に適切な漢字をあて、楷書で書きなさい。また、凝視ⁱ 審議^j の――線を施し

た漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に 滝^①が来てから、吹奏楽部は変わった とあるが、滝が来たことによって、部員たちにどのような変化が現れたか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 指揮者が優れていることで、緊張感が増し、演奏がまとまりのあるものになった。
- 2 部員全員が優れていることで、練習の質が向上し、ひとつの演奏を作り上げていった。
- 3 指揮者が優れていることで、練習がよりきびしくなり、練習に追いつけなくなった。
- 4 部員全員が優れていることで、緊張感が重荷になり、多くの部員たちがやめてしまった。
- 5 指揮者が優れていることで、練習量が多くなり、音楽の楽しさが全くなくなった。

問三 本文中の **I** に入る最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 頭
- 2 口
- 3 足
- 4 手
- 5 耳

問四 本文中に緊張しているせいか上手く声が出なかったとあるが、久美子が緊張していることがよくわかる最も適当な七字の一文を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問五 本文中に高揚感とあるが、久美子が演奏中に体験する高揚感がよくわかる最も適当な二十八字の一文を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問六 本文中に久美子は必死で演奏し続けたとあるが、演奏後でもまだ緊張している久美子の状態をよく表している最も適当な十字の部分、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問七 次の①～⑤のうち、本文の内容と合致するものには○、合致しないものには×を書きなさい。

- 1 部の新しい指導者である滝に対して、久美子をはじめ反感を抱いていた。
- 2 久美子は周囲の部員と自分を比べ、遅れをとっていると感じ、焦っていた。
- 3 オーディション前の久美子の様子を見た夏紀は、緊張をほぐそうと声をかけた。
- 4 久美子は副顧問の美知恵とも顔を合わせず、すべての演奏をやり終えた。
- 5 演奏しながら久美子は、自分のユーフォニアムの技術に自信を持ちはじめた。

